中国医学と道教（XI　金瓶梅から）

吉　元　昭　治

今回は、中国医学と道教との関係を、フィクションの世界でみることにした。権威的な医書や宗教関係の書物でみること以外に、中国のいわゆる、小説類のうちにこれらの片鱗をみることが可能であるとおもったからである。フィクションにはそれなりの材料や時代背景があったはずである。そこには生き生きとした人々の生活がにじみでている。

そこで、いわゆる四大奇書といわれる水滸伝、三国志演義、西遊記、金瓶梅および紅楼夢等の内容を検討したが、今総会ではこれらのうち、金瓶梅（『金瓶梅詞話』）についてふれたい。

本書はいうまでもなく、西門慶という、山東省清河縣の薬屋の主人の半生を描いたもので、時代は宋の徽宗（政和年間一一一一～一一一七年）の頃となっている。しかし本書の作者は、笑笑生というだけで本名は不明だし、明代の万暦中期――十六世紀の終り頃できたとされ、なお多くの検討がなされている。

主人公、西門慶には一妻四妾があり、本書の名も、潘金蓮、李瓶児と、潘金蓮の女中でもある春梅の三名の名から由来している。その他、彼には女性関係が多く、このため本書はその性的描写から、いわゆる淫書のレッテルがはられてしまっている。彼はついには、催淫剤の誤用で命を失うに到る。その後金軍の侵入で、一家離散の悲劇をむかえる百回本である。しかし、本書の評判はこれをゆるさず、続金瓶梅がうまれ、その後の物語がつづられている。

本書の内容を分析すると、いわゆる淫書とみるだけでは大きな誤りだとおもわれる。そこには、政治、経済、民俗、風習、音楽、詩詞、芝居等の芸術、飲食、家庭内の生活風景、娼婦の街、などあらゆる人々の生活が目の前にあらわれ、まさに、北宋の、汴京（現、開封）の有様を描いた、清明上河図の世界そのままである。しかし、本書がう

まれた、明代の情景が色濃くでているといえよう。

今回、発表する本書の中国医学と道教に関する部分を抽出、分類してみると、その量の多さと、多彩さにはおどろくべきものがある。

医学関係では、中医学の術名が多くでてくるし、登場する医師も立派な医師もいるし、やぶ医者もいる。医師に往診を依頼する手続や、その報酬の仕方も参考になる。また、なんでもや的な産婆も顔をだす。処方された薬物も降火滋養湯、加味地黄丸、薄荷灯心湯、金銀湯、金箔丸、帰脾湯、百補延命丹、延命丹、牛黄清心蠟丸、暖宮丸薬、朱砂丸薬など数多くみられ、その他接鼻散、和合湯、定心湯、神樓散、生姜湯などの治療薬ともいえないものもある。これらのうちには、房中的な精力増強剤、妊娠を期待するものもふくまれている。西門慶は、ある胡僧よりもらった催淫剤のため苦しみながら三十三才の命をおわる。

薬物療法のほかに、灸療法もみられる。直接灸であり、李瓶児の子供の官哥がひきつけたとき、攢竹、うなじのもと、両手の関、尺部、みぞおちの五個所に灸をすえ恢復するところもある。また理由はよくわからないが、セックスの時に、みぞおち、頭蓋部や、尾骶骨などに灸をする処が二、三ある。

医師による治療法が無効で、命も旦夕にせまったときには、道士が呼び入れられ、あの世にさしさわりなく渡れるよう配慮され、その生れ変る来世の姿をきく。

女性が分娩によって死に到るときは、前総会でものべた、血盆経があげられるし、さらに、地獄の閻魔大王など（十大地獄）に対しては、太乙救苦天尊に救いを求める。倒頭経というのもある。

病が篤いときには、その他、放生や、善書を印刷して配布し善行をつみ、寺廟で、捧げものや祭祀をする。

本書の内容からいえば、仏教より道教の方に比重が高いようである。道士にもいい加減なものや、好色なものもあり、銭痰火という祈禱師の滑稽な祭祀場面もあったりする（第五十三回）。一般的にこれら道士は、符録派や、経典派とおもわれるから正一教道士と考えてよいだろう。祈禱のなかにも、跳神というシャーマンの側面もみられる。

その他、民間信仰的なものや、卜占があり、算命師、地理師もでてくる。看百病、本命灯、求籤、亀卜、水腕占い、

相命などがある。あるいは、求嗣に強いおもいがあり、そのための服薬、交接の期日などもしるされている。

要するに、金瓶梅は、たんなる小説、それも淫書としてみるのではなく、当時の、中国の各部野の有様を如実に物語っているものといえ、中国医学と道教の流れの一時期を側面から知りえる重要な鍵をにぎっているとおもう。

（順天堂大学産婦人科）

療術としての按腹（腹とり）の歴史

中村　昭

按腹は腹診の意味に使われることも多いが、元来は腹を按すということであり、按して探ることもあれば、按して治療することもあった。療術としての按腹は按摩術の一部分であり、本来按摩は現今のように単なる筋肉の凝りを揉みほぐす術ではなく、針灸術と同様に広い応用範囲があった。それ故にわが国で最初に医師法を定めた大宝律令でも、医師医博士、針師針博士とともに、按摩師按摩博士の規定があったのである。

それ以後わが国の漢方医学は湯薬療法が主流となり、針灸術は従属的な地位を占め、按摩はさらに低い地位に転落した。江戸後期文政十年に梓行された大田晋斉の『按腹図解』には「世に此の技を業とする人多くは盲人、寡女或は